

# ドクターの肖像

202



# 伊東昌子

長崎大学 副学長 ダイバーシティ推進センター長

長崎大学病院 メディカル・ワークライフバランスセンター長

長崎発「画像」の世界的臨床研究者  
活力ある医療社会の実現へ

聞き手／中村明（株）メディカル・プリンシプル社 社長）  
文／郷好文 撮影／松村琢磨

## エリートコースを邁進中 完璧主義で突如、不登校に

下ばかり見ている子だった。本を読み、外にはあまり出ず、もの静かな女の子だった。大分県に伝わる民話「きつちよむさん」を読み耽っては、一人でくすくす笑っていた。

長崎県普賢岳に近い、森に囲まれた雲仙小学校に通った。1階に小学校、2階に中学とごぢんまりとした建物で、1学年は20人ほど。競争など無縁だったが、公務員の父の転勤で、半島の麓の観光都市、島原市に引越すと内気な女の子の中のもう一つの資質が目覚めた。上を目指すことである。

転校先は島原第一小学校、通称「一小」。2年生の2学期の転校先の規模は10倍。割り算もできなければタテ笛も吹けない。担任の先生が居残り特訓してくれた。すると2学期の4科目の成績は全て5番以内になった。やればできると思った。

学級委員までする活発な子に変身して、「一中」（島原第一中学）に進学。県内のマンモス校で1学年13組あったが、学年トップを通した。放送部という「喋る部活」でも活躍。勢いを保ち県立島原高校、通称「島高」に進学。城のほぼ隣りに建つこの3校は市の中心にあり、県内エリートの「一小・一中・島高コース」、そこまでは完璧だった。

ところが学校に行けなくなった。「中学でも成績が優秀で、高校でもそれを続けようとして完璧主義者になったのでしょ

か。そこから抜け出せなくなりました」

## 島原から3時間半の通院 1年間の高校休学

伊東昌子氏は、高校1年生の時、うつ状態に襲われた。何とか進級はしたものの、結局休学。当時国内で数少ない心療内科を頼って、九州大学医学部附属病院を受診した。

診断は自律神経失調症。島原から福岡まで列車で片道3時間半の道のり。清潔でなければ気が済まない強迫性障害の一つ、潔癖症も出た。

「朝から病院に向かうと、どうしても病院でお昼の時間に。でも食堂で食べられない。スプーンやお皿を他人と共有できなくて……」

潔癖に憑かれた象徴が歩道橋だった。車が来なくても階段を上り、きつちりと下りる。「ズルして」渡ろうなんてとても思えなかった。だが心の中の歩道橋の上で彼女は立ち止まっていた。先にも行けず、下りることもできない。

九大心療内科での効果もあっただろうが、治療の過程で気がつきがあった。「完璧は目指すものではないというのが、何となく分かってきました」

1年留年したが、成績を上位に戻した。そして、長崎大学医学部を受験して合格。進学後、1浪した友人が長崎大学に入学してきて同じ道路を歩いた。歩道橋を上らずに、左右を見て下の道を横断した。友人は言った。

「変わったね、昌子」

ここに伊東昌子氏が凝縮されている。

## 一枚の写真で診断が付き 実力主義でやっていける世界

患者の全身を診たいと考えて内科の医局に出入りし始めると、親しくしていた医師の一言が彼女の運命を変えた。

「放射線科を勉強していると、将来は何にでも役立つからね」

早速、放射線科の医局に行くと、確かに全身の疾患を診ることができそうだった。治療も診断も研究も、という広がりがある。卒業と同時に、長崎大学医学部の放射線科に入局した。「一枚のX線写真でばつと診断が付けられる。実力主義でやっていける世界。すぐく格好いいなって思ったんです」

当時は「読影」というように読む「眼力」がもてはやされた。またCTはワンスキャンに数分かけて、粗い画像の断面を見る時代。単純X線写真から異常所見をいかに見逃さないか、正常像と異常像の違いを見抜けるかは技術であり実力主義であったが、地味で単調な仕事にも見えた。

## 誤解を招かない正確な診断 陰影に富んだ師の教え

伊東氏が恩師と仰いだ、林邦昭助教授（後に教授）は学生や医局員にテキスト“Chest Roentgenology”の輪読会を開いていた。そ

## PROFILE

……………いとう・まさこ

1980年	長崎大学医学部 卒業 長崎大学医学部 放射線科 入局
1981年	佐世保市立総合病院 放射線科 研修医
1982年	長崎大学医学部附属病院 放射線科 研修医・医員
1982年	日本赤十字社長崎原爆病院 放射線科
1984年	渡米
1985年	帰国。長崎大学医学部附属病院 放射線科 医員
1994年	長崎大学医学部附属病院 放射線科 講師
2004年	長崎大学医学部・歯学部附属病院 放射線部 助教授(副部長兼任)
2007年	長崎大学医学部・歯学部附属病院 放射線部 准教授(副部長兼任)
2012年	長崎大学病院メディカル・ワークライフバランスセンター センター長・教授
2014年	長崎大学副学長 長崎大学ダイバーシティ推進センター センター長・教授

### 受賞

日本骨形態計測学会 学会賞受賞、日本骨粗鬆症学会 研究奨励賞受賞、  
日本骨代謝学会 学術賞受賞、日本骨粗鬆症学会 学術振興賞

### 学会・専門医

放射線専門医、Certified Clinical Densitometrist (CCD)、  
Certified Densitometry Technologist (CDT)、日本骨形態計測学会理事長、  
日本骨代謝学会理事、日本骨粗鬆症学会評議員



ここで「そもそも陰影とは何か?」と意表を突く切り口で問いかける。なぜ「病変」と言わず「陰影」というのか? 濃度とは何が濃く何が薄いのか。軽妙に本質を掘り下げていく姿に惹かれた。白い・暗いと表現する代わりに「肺野の透過性が低下している、考えられうる理由はなにがし」と簡潔に説明するよう教えられた。

ある時、医局員が「先生、所見に自信が持てないときはどう書けばいいですか?」と質問した。林助教授は「自信がありません」と自信を持って書きなさい」と答えた。

伊東氏は師から「放射線診断ではシンプルに正確に誤解を招かない診断をしなさい」と叩き込まれた。仮説をもってCT検査を行い、MRI、血管造影と情報を増やして診断にたどり着く。「でも読影者によつて差が出ませんか」という意地悪な質問をされると、伊東氏は「確実に差が出ますね」と切り返した。

「一枚のモノの睡蓮の絵を観たとしましょう。ただ睡蓮だと観る人もいれば、そこにもっと深いものを読み取る人もいます。それと同じです」

「陰影」に富んだ答えを返すのも師の教え。伊東氏はある一枚の胸部X線写真で、他の誰もが見えない「ハート」の影さえ見抜いた。

### 生涯の伴侶の「ハート」を 胸部X線の読影で射貫く

卒業後1年目の放射線科研修で、伊東氏は一枚の胸部X線写真に惹かれた。気胸を写真に見つけた。気胸は背が高く痩せ型の若い男性

に多い。隣でその写真を見ていた研修医が「あれ、この写真、僕の同級生だ」と言った。

医師なかと、なぜか気胸の持ち主の名前を憶えた。2ヶ月後に放射線科の研修に来る。一目見て「この人だ」と直感した。思った通り背の高い痩身の好男子。真っ直ぐな背筋は剣道で鍛えたものと知る。「流されるのが嫌。やりたい研究をしたい」と生き生き語った。その人、伊東正博氏は彼女の夫となった。

伊東氏は彼の胸の像に自分を重ねて医師の道を歩み出した。当時の医局は男性社会で女性には彼女一人。女性医師としての現実に直面した。

「当直ベッドは男性と共用、女性用シャワールームありません。トイレが階ごとに整備されているだけです。ある学部や研究所では3階の女性は1階まで下りてたんですよ」

### 夫の米国留学に子連れで同行 仕事が好きで自分に目覚める

さらなる女性の現実は出産である。医師4年目に第一子を出産。産休・育休という言葉さえ存在しない時代、出産直前まで働き6週間で復帰した。

だがすぐに休職。米国に行くためだ。夫はイリノイ州立大学で血管病理を学ぶために留学中。子連れでその夫を追った。

「米国到着後最初の1週間は窓から外をぼーっと見て、『あたし、いつになったら外に出られるんだろう』って思っていました」  
米国生活の足である車、でも運転は大好き





◀センター設立当時の  
長崎大学病院長 河野茂氏と



◀結婚式



◀おもいやいセンター  
スタッフと



▲生後5ヶ月。母と



▲米国での生活も満喫



◀諫早高校での  
リケジョセミナーにて

だったので、フロリダをはじめ遠方まで自動車旅行をするようになった。米国文化も分かった。米国での生活を満喫したが、足りないものにも気付いた。

「そうか、私は仕事が好きだ。早く日本へ戻って、仕事がしたいと思いました。でも大学のラボで働こうにも子供が小さすぎて」

## 第二子を出産 4週間で職場復帰

夫と共に帰国し、以前と同じ医局に復職した。すぐに放射線科専門医を取得、引き続き学位論文の研究テーマを決めようとした。

ところが第二子を妊娠、研究は棚上げして出産と育児に入った。だが2人目はさらに短縮し、現在の産後休暇制度の半分である4週間で職場復帰した。林教授はまだ伊東氏が研究すべきテーマを覚えていた。

「ところで骨粗鬆症をやらなにか」

## 骨粗鬆症を当時初めてCTで 骨密度測定にのめり込む

『医学用語辞典』（日本医学会医学用語委員会編）に骨粗鬆症が掲載されたのは1975年。それから15年後、1990年に当時厚生省の老人保健事業に『骨粗しょう症予防健康教育』が追加されたが、まだ「こつそしょう」と言える人さえ少なかった。

伊東氏を取り組みだしたのはその2、3年前である。

「教室で誰もやっていないマイナーな領域でした。でもやり方は工夫しました。それまで骨密度を測るのはCTでしたが、より簡便で精度の高いDXA法が当時ブームでした」

DXAは一流アスリートが運動プログラムにも取り入れられる正確さがあるが、一つの疑問を持つ。測定のための測定でいいのか。

「私は放射線科の医師なんだから、画像を診断しながら骨密度を測れたらもっと幅の広い研究ができるはず」

当時のCTより簡便に測定ができるDXAが診療・研究の主流となったが、それで失われるものもあると、あえてCTで研究を始めた。

「完璧を望んで失敗したこともありましたが、でも、この時ばかりはのめり込みました(笑)。学位を取得した後、林教授に言ったんです。『"Radiology"に3報が掲載されるまでやらせてください』って」

放射線分野の一流誌に3つの論文を載せる——遠い目標に見えたが、あつと言う間にそれをクリアした。

## 骨病態の解明、疾患の骨変化 莫大な論文の引用数

1991年7月の“Vertebral density distribution pattern: CT classification of patients undergoing maintenance hemodialysis”——血液透析中の患者の脊椎骨密度分析を皮切りに、1993年11月に“Relationship of osteophytes to bone mineral density and spinal fracture in men”



▶放射線医員の頃。  
読影室シャーカーカステンの  
前で



▲家族(夫・長女)と共に。思うようにとれない  
家族と過ごす時間が大切

1995年1月に“Trabecular texture analysis of CT images in the relationship with spinal fracture”を発表。いずれも患者の骨病態の解明、また疾患に伴う骨変化という放射線科医の切り口が見える。とりわけ後者2本の引用数の多さは特筆しておきたい。3報出した後は研究がますますおもしろくなり、もっと続けたいと教授に言った。「先生は『じゃあ伊東さんがもう止めてもいいと言っのを聞きたいから、それまで続けなさい』と言ってくれたんです。それ以来、今もずっと続けています」

### 独創・緻密の研究スタイルで “m. Ito”の名が逆輸入される

医師として助教授まで昇りつめ、研究者として骨粗鬆症発生メカニズムや骨の脆弱性領域で世界的な権威となった。“m. Ito”の名は逆輸入され、骨粗鬆症の基礎研究と臨床研究を結ぶ橋渡し研究の第一人者となった。伊東氏の研究スタイルは独創で緻密だ。

骨粗鬆症診療における骨密度測定だけではなく、骨強度の面から研究の需要が増していた骨質評価を行い、ハイテクを応用した骨梁構造や皮質骨多孔性、材質や力学的な強度に至るまでマイクロレベルで分析する。微小なサンプルを携えて、太陽系の起源の探究からウイルスの動きまで研究対象とする、兵庫県にある大型放射光施設「Spring-8」まで活用した。「例えば、航空写真で川の氾濫を予測する解析法がありますが、私はそれを骨構造解析に応用しました。また、橋の梁はどういう材料を使って、どういう形態だと強くなるかなどシミュレーション技術である有限要素解析を利用して、骨強度解析に利用したりしました」前人未踏の分野で始めた研究は、偶然に学会で会ったUCSF放射線科のGenant教授が見守り指導し続けた。

初めて会った時、伊東氏がアドバイスをほしいと頼み20分間ほど話を聞いてもらう。翌年の国際学会で再会した時、伊東氏のことを覚えていて、研究は進んでいるか励ましてくれた。それ以来メンターとして研究・人生を長い間支えてくれた。

「初めて北米放射線学会で、同じセッションで講演する機会があり、それが発端でした。そのときは自分の強運に感謝しました」

### 治療薬開発にも参加 応用研究は宇宙にも広がる

まずは海外から先に認められた。次に国内では、国立長寿医療研究センター

運動器疾患部長の池田恭治先生と長期に共同研究を行い、多くのことを学んでいく。情報を研究レベルに留めず、加齢や骨粗鬆症薬物治療による骨の変化を臨床的に解明した業績で、「エルデカルシトール」、「テリパラチド」、「イバンドロネート」などの骨粗鬆症治療薬の開発にも参加する。さらに、宇宙飛行士の骨の変化の状態を小動物でシミュレーションした研究など広範囲に広げ、日本骨形態計測学会学会賞などを受賞した。だが伊東氏の研究の真髄は診断と背中合わせのところにある。



▲第17回日本骨形態計測学会のセミナー講師、池田恭治氏(当時国立長寿医療研究センター)と共に



▲学会長としてハウステンボスで開催した第17回日本骨形態計測学会の特別講演の演者 Harry K. Genant氏(UCSF)と

\*DXA: Dual energy X-ray Absorptiometry=二重X線吸収法。2種類のX線を照射して、骨と軟部組織の吸収率の差によって骨密度を測定する装置



## mission, vision, passion

# 長崎から世界を変えていく仕事を続けたい

骨密度測定で毎年受診する女性がいた。あの年の測定後、その女性が「相談をしたいのですが」と言った。腫れているところがあるという。伊東氏が鼠径部を触診するとリンパ節である。足の裏には黒いできものもあった。悪性黒色腫（メラノーマ）に間違いなかった。「なぜこんなになるまで来なかったの？」と聞くと、「伊東先生に相談したくて、骨の検査日まで待ってたんです」と。

伊東氏はすぐに病棟に連絡をして入院させた。下肢切断の一手前だった。

「以来毎年『元気にしています』と言って、骨密度の検査に来てもらっています」

女性医師だから頼られ、できることがある。家庭では妻であり母。子育てをしながら、研究者としても臨床者としても全力を貫けたのはなぜか。聞くと明快な答えが返ってきた。

「夫の存在です。私がやりたいと思うことに全て背中を押してくれました。子供が小さい時も学会で演題が採択されると『行ってきなさい』と温かく送り出してくれました」

夫の伊東正博氏は一病理医として全身あらゆる疾患を診てきた。長崎医療センターでは研修医教育と教育センター室長を務め、人間全体も見えてきた。その眼差しで妻を医師として眺められたからこそ、成長機会を失わずに済んだ。妻が育児と板挟みになった時も、「仕事を辞めたら何も残らない。研究があるからこそ君らしさがある」と励ましてきた。

夫の支援に感謝してきた伊東氏が、今度は「背中を押す側」に抜擢された。

### 長崎県の就労維持支援 初の ワークライフバランスセンター長に

数々の学会賞を受賞し、メディカル・ワークライフバランスセンターの教授として医師の働き方改革をする。さらに副学長として、大学全学の研究者を対象にするダイバーシティ推進センター長の役割をも担う。

「最初から100じゃなくて大丈夫、まず70を目標にやりましょう。完璧だと結局辞めてしまうかもしれませんよ。70どころかゼロになります」

チャームिंगな笑顔と長崎弁のイントネーション。相手の心にそっと入り込んで、深いところで通じ合える。

「(高校に)ちよつと残ってくれて」  
あの日々を快活に笑い飛ばす伊東氏は、モットーを語る。

「今しなければならぬことを一生懸命やる。そして目標という上を向きながら、足元に目を落としてひたむきにやる。それが私の仕事の流儀です」



出産で辞めて医局に戻って来ない、夫の転勤で大学を離れて戻らない女性医師も多かった。医師への夢は捨ててしまったのか、どうして戻れなかったのか。伊東氏は2000年頃から「ながさき女性医師の会」という有志の集まりを運営し、非公式に女性医師の職場復帰や就労維持支援をしてきた。その活動が実を結び、「メデイカル・ワークライフバランスセンター」が病院内に設立された時にセンター長に就任し、教授職を任せられた。

「女性医師だけでなく、育児や介護をしながら仕事を継続したいと考えている男性医師のサポートもしています」

夫の転勤で大学から離れた人も、再び現場に出るのが恐くなった人も相談できる、支援が必ずもらえるという認知をしてもらう。そのモチベーションを引き出す「ワーク」と「ライフ」はいつもそれぞれが必要なのではない。「ある時は仕事が100、ある時は家庭が100でもいい。こういう医師になりたいという最初の思いが、出産や育児で押し込まれていたなら、それを出せるよう支援をします」

## 医学部から長崎大学全体へ 副学長に就任

さらに医師が力を発揮できる条件整備を全国に先駆けて長崎県が行っている。

その成果が、副学長になり全学を対象とするダイバーシティ推進センターへの展開となる。別名は「おもやいセンター」。おもやいとは「お互い様」という長崎の方言。研究支援員

の雇用、学童保育の運営、介護コンシェルジュによるサービスなど教育者と研究者の全方位の支援を行う。江戸時代から多様な人種と学問を受容してきた長崎ならではの、もちろんスムーズなことはかりではない。

「そんなことで数年も悩んでいたなんて、と思うこともあるが、支援されていることに甘えずきないで、と言いたくなるときもあります。でも研究支援員のサポートがあって学会で賞をもらった女性医師は、私にも誇りです」

伊東氏には医師、研究者の実情が分かる。第1回西予市おイネ賞事業最優秀奨励賞を受賞した「いち女性医師としての、私の勤めと次世代への期待」でこう書く。

「(医師だから)過重労働、長時間勤務が当たり前ではない。うつ状態や慢性疲労症候群をつくってきた。寝食を忘れて学び働く時期は必要だが、生涯やり続けるのは無謀である」  
そして、人の心身のバランスの大切さも深く理解している。だから東京の地下鉄の駅でこんな体験を引き寄せた。

## 異質なものを受容し変革した 「長崎の地」から変えていく

「東京の地下鉄ホームでおのぼりさんの私は、ホームに立つ女性に『〇〇駅へ行きたいのですが、ここで大丈夫ですか?』と訊いたのです。今にしてみれば、手を差し伸べなくてはという直感が働いたのかもしれない」  
女性はハツとした顔で「大丈夫です」と返事をして、伊東氏と同じ電車に乗った。

「目的の駅に着く頃、その女性が近づいてきたんです。『さつきは優しく尋ねてくれてありがとう。実は、ホームから飛び込もうと思っていたんです』と目から涙があふれていたのです。引き寄せてしまったのでしょうか」

黙って握手をして電車を降りた伊東氏の頬にも涙がたついていた。あの時の女性の顔は今でも記憶から消えないという。

灰色の歩道橋から伊東氏はどうやって下りたのだろうか? 実は下りていないのかもしれない。それでも歩道橋の下をずんずん渡るこゝができるようになった。そして、上を向いて、歩道橋の上でたたくむ人に、包容力のあふれる笑みを浮かべてこう言えるようになった。「きつと渡れるようになるから」

放射線科の臨床経験に裏打ちされた骨粗鬆症研究で国際的な業績を挙げた。次のステップとして医療人のためのワークライフバランスをはじめ、さらに研究者や教育者のためのダイバーシティ支援を手掛ける。

その姿は、数百年にわたって多様な世界への入口となり、異質なものを受容しながら日本を変革してきた「長崎」というユニークな地の歴史と重なる。数奇な運命に揉まれながら、日本のために働いた異人や日本人の列伝とも重なる。

「医師として、また研究者として学んできた mission, vision, passion をもって、長崎から世界を変えていく仕事を皆さんとずっと一緒にしていきたいですから」

優しさと強さを兼ね備えたまなざしに、伊東氏が夢みる新しい異国の姿が映っていた。